インマヌエル、
神は我々と共におられる

マタイ1章18～25節
2021年12月12日
松田 基子 師

待降節第3週に入りました。 来週は愈々クリスマスです。 神の御子は、神様に背き、永遠の滅びに向かう人類を救うために、人の子となってこの世に生まれて来て下さいました。 人間には到底考えることの出来ない、神様の人類に対する愛によるものです。 マタイは神様の**深い愛**が、イスラエルの**歴史を通**して、この世に**現された**ことを、**マタイ福音書に**記しました。 神様の人類救済の歴史は、具体的には紀元前2千年の頃、神様の呼びかけに答えたアブラハムから始まり、彼の子孫イスラエルが、選びの民となり、紀元前千年頃、ダビデが王に立てられ、神様は彼に永久の王座を与えると約束なさいました。 しかし、ダビデの子、ソロモンの晩年における不信仰は、次の時代で、王国を分裂させました。

10部族は、北イスラエルとなり、僅か2部族、即ち、ダビデを出したユダ部族と、ベニアミン部族で、小さなユダ王国となりました。 神様はダビデとの約束の故に、偶像に走る王が続いても、ダビデ王家の灯を消さないように、支えられました。 一方北イスラエルは、数回、王朝も変わり、紀元前722年、アッシリアに滅ぼされてしまいました。 神様の憐れみで、北イスラエルが滅亡しても、ユダ王国は生き残ったのですが、紀元前587年、ダビデの血筋が保たれて来た王国も遂に、バビロニア帝国に滅ぼされ、ダビデ王家を初め、高官や技術者、また、力有る者などは、バビロン捕囚として、ユーフラテスのかなたバビロンに連れて行かれました。

人の目にはダビデ王家は、滅んでしまったかに見えました。 神様は、サムエル記下の7章16節で、ダビデに対して、

「**あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。**」

と約束されましたが、その約束は反故にされたのでしょうか。 いいえ**神様は、約束を果たされた**事を、マタイは福音書の冒頭に、その証明としてアブラハムからダビデ、そしてイエス様に至る系図を記しています。 **それはどの様にして果たされたか**を記しているのが、今朝の**聖書箇所**です。

ところで、『ユダヤ人』
と言う呼び方がありますが、元々はユダ王国に属する人々を、ユダヤ人と呼びました。 後代においては、

『バビロン捕囚から帰って来た人々、紀元前515年に、エルサレム神殿を再建し、ユダヤ教団として、再出発した人々』

を指します。 彼らは、

『バビロンでの捕囚時代後期に、ユダ王国が滅び、バビロン捕囚になったのは、自分達がアブラハムの子孫として、神様に特別に選ばれ、神様に信じ従う様に、命じられたにも拘わらず、神様に背いた生き方をしたため、このような、厳しい裁きを受けたのだ。』

しかし、

『神様は、我々を滅ぼす事が目的ではなく、我々が悔い改めて、神様に立ち帰る事を求めておられるのだ。 神様は憐れみ深く、慈しみ深いお方だから、神様に聞き従うなら、神様は祝福して、故国に帰らせて下さる。』

だから、

『我々は、神様に聞き従うために、その守るべき律法を整え、故国に帰ったなら、律法中心の生き方をしよう。』

と決意して律法を整えました。

彼らは、ペルシャの捕囚解放令によって、エルサレムに帰って来ますと、律法を守る生活を始めました。 今度はエルサレム神殿を中心に、律法による統治が始まりました。 しかし、その後、ユダヤが独立出来たのは、僅かな期間で、殆どの時代、大国の属領でした。 紀元前63年、ローマのポンペイウスが、エルサレムを占領し、以後ユダヤは、ローマ帝国の支配下に置かれました。

ユダヤ人達は、領主に納める税の上に、ローマ帝国が徴収する、人頭税や、通行税、物品税など、様々な税に苦しい生活を強いられていました。 **民族の望**みは、イスラエルの黄金時代、**ダビデ王の時代**が、再び**回復する事**でした。神様は、ダビデ王に永久の王座を約束されました。 預言者イザヤは、イザヤ書11章1節で、

「**エッサイの株からひとつの芽が萌え出で、その根から一つの若枝が育つ。**」

と預言し、エレミヤはエレミヤ書23章5節で、

「**わたしはダビデのために正しい若枝を起こす**」

と預言しています。

『ダビデの子孫からメシアが現れ、ダビデ王時代をもたらせてくれる。 神様早く、ダビデの子、メシアを送ってください。』

との祈りが捧げられました。 民衆はローマの圧制を解放し、自分達の生活を楽にしてくれるメシアを求めました。 しかし、**神様の人類救済のご計画**は、そんなところにあったのでしょうか。**人間の思い**は、何時も**自己中心**です。 自分の利得にしか心がありません。 神様はそんな事のために、**メシアを**送られるのでは**ありません**。

さて、マタイ福音書1章1節から、17節の系図の中で、大勢の人名が記されており、その中に、王は沢山いたにも拘わらず、6節に、

「**エッサイはダビデ王をもうけた。**」

と、ダビデにだけ、王の位が記されています。これは神様が、

『ダビデに永久の王座を約束された事を、マタイは意識しているのだろう。』

と言われます。 神様が約束された、**永久の王座に就く王**こそ、**真のダビデの子、真のメシア、救い主**なのです。 **イスラエルの民**は、**神様の人類救済のご計画を担うために選ばれた民**です。 イスラエルに於ける真の王は、ヤハウェと呼ばれた主なる神様です。 神様がイスラエルの真の支配者であり、ダビデを初め、歴代の王たちは、真の王である神様の**王権の代行者**であり、ヤハウエの**僕なのです**。

ですから、人間の王が、永久の王座に就くことは出来ません。 永久の王座に就かれるのは、神の身分にあられる御方です。 それは神の御子でした。 神様が人間を創造された目的は、人間が神様の愛の御心に従って、神様に聞き従い、人と人とが愛し合い、被造物を大切にして、麗しい世界を築いていくためでした。
しかし、人間は神様に背いて、罪を愛し、永遠の滅びの道を選び取ってしまいました。 そのような人類の行く末を、神様は放置なさることができませんでした。

神様はそこに、人類救済のご計画を立てられ、永久の王座に座られる、神の御子を人の世に遣わし、その罪を贖う務めをお与えになったのです。 そこで、神の御子が、人の子として、誕生させられるためには、母親の胎が必要でした。神様はそのために、ナザレの町の一人の、名も無き、信仰篤き乙女をお選びになりました。
その乙女の名は、マリアでした。 彼女はダビデ家のヨセフという人の許嫁(いいなづけ)でした。

ある日、天の使いは、マリアに現れて、

「**マリア、恐れることはない。 あなたは神から恵をいただいた。 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。いと高き方の子と言われる。 神である主は、彼に父ダビデの王座を下さる。 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。**」

と告げました。 マリアは、恐れと、これから、何が起こるのか分からない不安、その全てを神様に委ね、

「**お言葉どおり、この身になりますように。**」

と答えて従いました。

神様はマリアに、その事を告げられたのですから、許嫁のヨセフにも、その事をお告げになったのでしょうか。 マリアの願いに反して、神様からヨセフには何のお告げも無いままに、日は過ぎて行きました。 マリアの身体がそれと分かる様になっても、ヨセフへのお告げはありませんでした。 それよりもマリアの様子を伝える人が現れました。 マタイ1章18節に、

「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。 母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊に依って身ごもっていることが明らかになった。」
とあります。

当時の彼の地での結婚は、親同士が決めて、適齢期に入ると、双方の意志を確認して、婚約し、1年後に結婚式を挙げて、結婚生活を始めたのだそうですが、婚約期間中から、夫婦に準ずる法的拘束力を持っていたそうです。 神様からのお告げの無いヨセフにとって、その現実は受け入れ難いものでありました。 19節には、
「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表沙汰にするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」
とあります。 ヨセフと言う人は、若いながら、正しい人でした。 ここでの正しい人と言う意味は、神様を信じて、律法を忠実に守っていた人のことです。 彼は陰日向なく、誰にも親切で、誰からも非難される事の無い好青年でした。 彼はまた、相手を思いやる心の持ち主でした。 このような状況に置かれて、自分の正しさを主張する人なら、容赦無く訴え出た事でしょう。 律法が最高の判断基準になっている社会です。 申命記22章23節、24節には、
「婚約中に他の男性と関係したならば、石で打ち殺されねばならない。」
とあります。 ヨセフはそのような事が出来る人ではありませんでした。 彼は心の優しい人で、相手が傷付くよりも、自分がその責めを引き受ける人でした。 そこで彼は、
『マリアの事を表沙汰にするのを望まず、密かに縁を切ろうと決心したのでした。』
密かにと言うのは、法廷に持ち出さずに、二人の証人を立てて、離縁状を渡すことです。 婚約中であれば、その方法でも離縁することができました。

そうすれば、マリアに汚名を着せずに、ヨセフの身勝手さで、マリアと子供を拒否した、あの悪い男と言うレッテルが、ヨセフに付けられる事でしょう。 マリアと胎の子を守るには、その方法しか無いと考えたようです。 神様はヨセフがそのように悩みに悩み抜いて、決断したところへ、天使を送られました。 20節に、
「主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。 マリアの胎の子は、聖霊によって宿ったのである。』」
とあります。

旧約聖書時代から、初代教会時代、神様はご自身の御心を示されるのに、夢を用いられる事がありました。 天使はヨセフに、
「ダビデの子」
と呼び掛けています。 ヨセフ自身、その事をどのくらい意識していたのかは、分かりませんが、何しろダビデから千年も経っているのです。 それは神様にしか分からなかったかも知れません。 ヨセフの暮らしは、家具などを造る大工だったと言われています。 パレスチナ地方の家は石造りや、土造りが多くて、木材は貴重です。 家具や農具などが木で造られました。この様にヨセフは名も無い、普通の働き人として生きていました。 しかし、天使に、
「ダビデの子、ヨセフ」
と呼び掛けられたことによって、彼は自分に、何か神様からの使命がある事を感じました。

ダビデの子とは、紛れもなく、待望のメシアの代名詞です。 メシアがお出でになる。 そこに自分も引き入れられるのだ。 何のためだろう。 天使はヨセフに、マリアを、彼の妻だと言いました。 全ては、神様の御計画によって導かれている事を、ヨセフは悟りました。 その神様からの言葉は、マリアの胎の子は、聖霊によって宿ったのであると言う、驚くべき言葉でした。 神様が、ご自身の御心と力に依って、マリアの身に働かれたのでした。 ヨセフはこれまでの、
『なぜ、どうして』
と言う疑問と、苦しみが一変に取り去られたのでした。 そのヨセフに、天使は続けて告げました。 21節に、
「マリアは男の子を生む。 その子をイエスと名付けなさい。 この子は自分の民を罪から

救うからである。」
神様がマリアの身を通して、送り出される赤ちゃんは、男の子です。 名前はイエスと名付けるようにとの命令です。 イエスとは、
『イスラエルの神は救い。』
と言う意味です。 その子は神の救いを実現してくれるのです。 しかし、それは民衆が願っている、貧困、苦難からの救いではなくて、
『人間の存在を、永遠の滅びに引きずり込んでいく、**罪からの救い**』
を成して下さるのです。

天使は続けて、22節に、
「**このすべてのことが起こったのは、**
主が預言者を通して言われていたことが、
実現するためであった。
『見よ、おとめが身ごもって、男の子
を生む。 その名はインマヌエルと
呼ばれる。』
この名は、
『神は、我々と共におられる』
と言う意味である。」
と告げました。

神様はダビデに、永久の王座を約束されました。 その事を、イスラエルが神様に聞き従わなたったからと言って、取り消されることはありませんでした。
『約束は必ず守られる』
と、預言者を通して預言させておられます。
この預言は、ダビデから三百年後の預言者
イザヤの言葉です。 限りなく聖く正しい神様は、罪に汚れた人間と共におられる事はできません。人間が太陽に近づけず、それは死を意味するように、不可能な事です。 しかし、神様は、そんな罪に汚れ、滅んで行く、人類を見過ごしになさることがお出来になりませんでした。 神様は、人間に近づき救うために、神の御子を人の世に誕生させ、人と共に居ることを決断なさったのです。

それは、この地上ばかりではなく、御子の十字架の贖いによって、天国への道を開き、御子を永久の王座につけて、信じる者を御国に招き、永久に人間と共に居ることを決断して下さったのです。 24節に、
「**ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じ**
たとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれる
まで、マリアと関係することはなかった。
そして、その子をイエスと名付けた。」
とあります。 ヨセフは自分の正しさを捨てて、神様の御言葉に従いました。 神の御子が罪に汚れた人間と共に生きるために、人の世に生まれて下さるためには、**マリアの信仰の従順**と、マリアと御子を支える**ヨセフの従順**がありました。
神様に従った2人の信仰によって、ダビデに与えられた、永久の王座に座するお方がお生まれになり、**インマヌエル神我らと共にいます**と言う**預言が成就した**のです。

わたしたちはこの様に、神様の計り難い、
人類に対する、愛とあわれみを噛みしめつつ、
クリスマスを迎えようではありませんか。

お祈りを致します。
愛と憐れみに富み給う天の父なる神様

あなた様の私達人類に対する愛と憐れみは計り難く、罪深い私達を永遠の滅びから救うために、永久の王である、御子イエス様を人の世に誕生させ、インマヌエルの約束を果たしてくださいました。 私達はこの御愛を更に深く知る者とならせて下さい。

そして、
喜びのクリスマスを迎えさせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りをいたします。
アーメン。